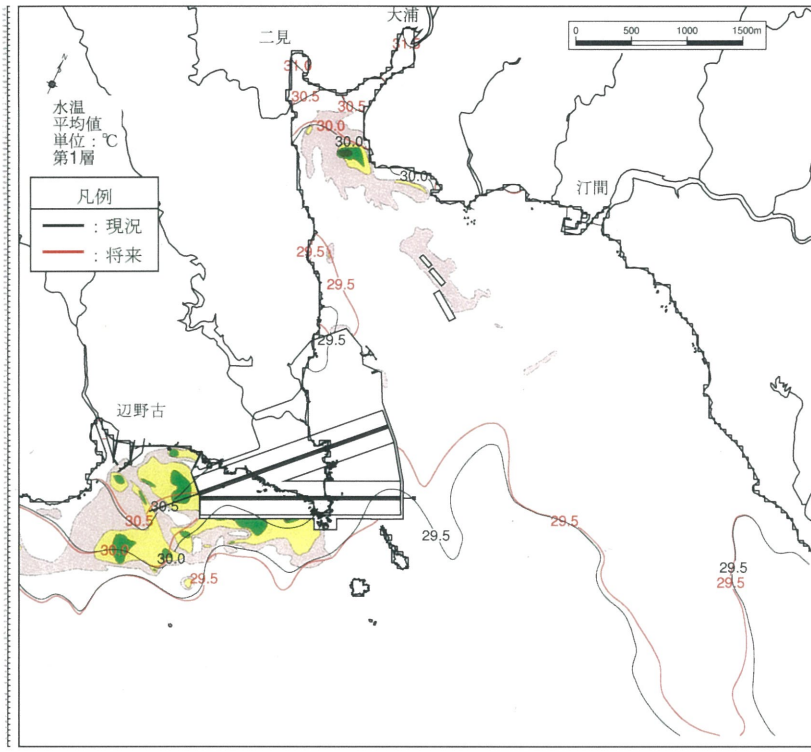


(水温分布)



(水温変化域)

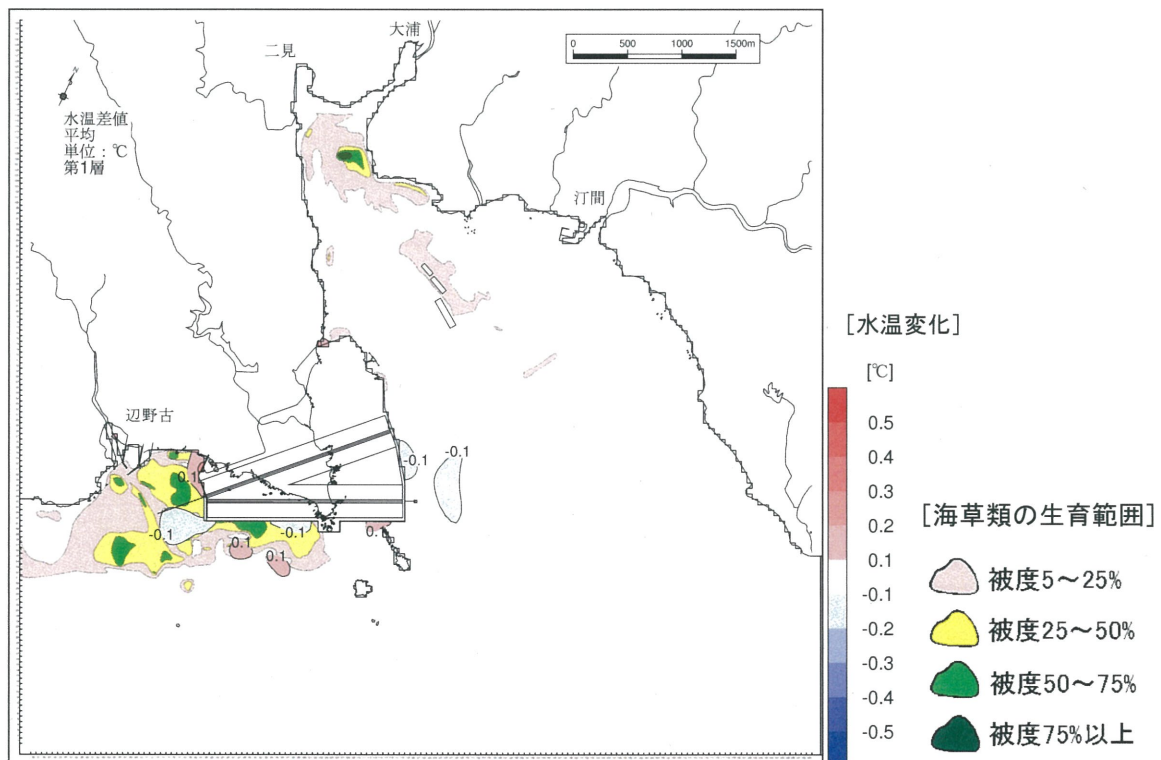
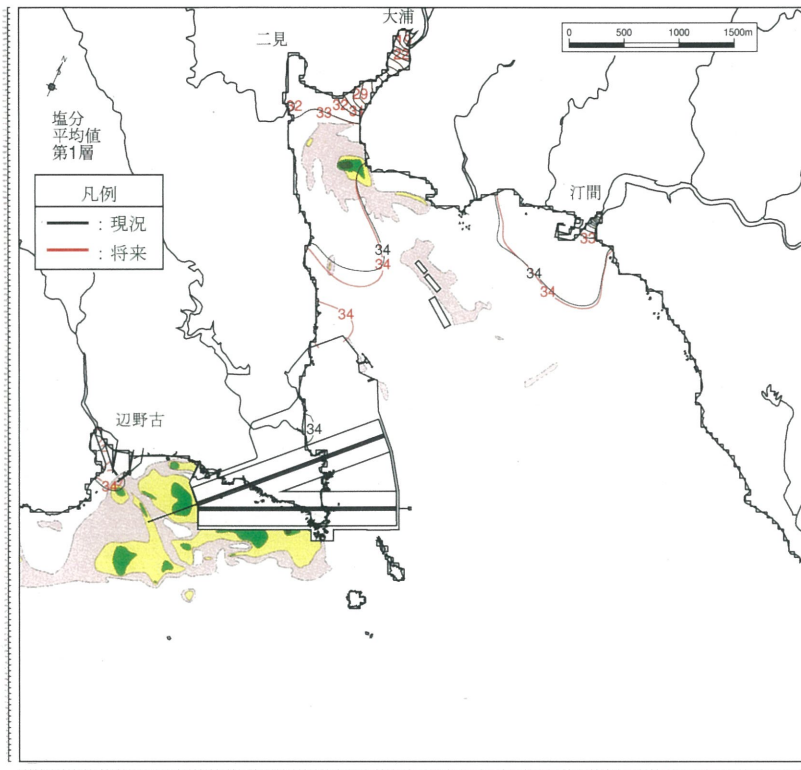


図-6. 15. 2. 2. 31 存在時の水温変化（夏季、第1層）と海草類の生育範囲

(塩分分布)



(塩分変化域)

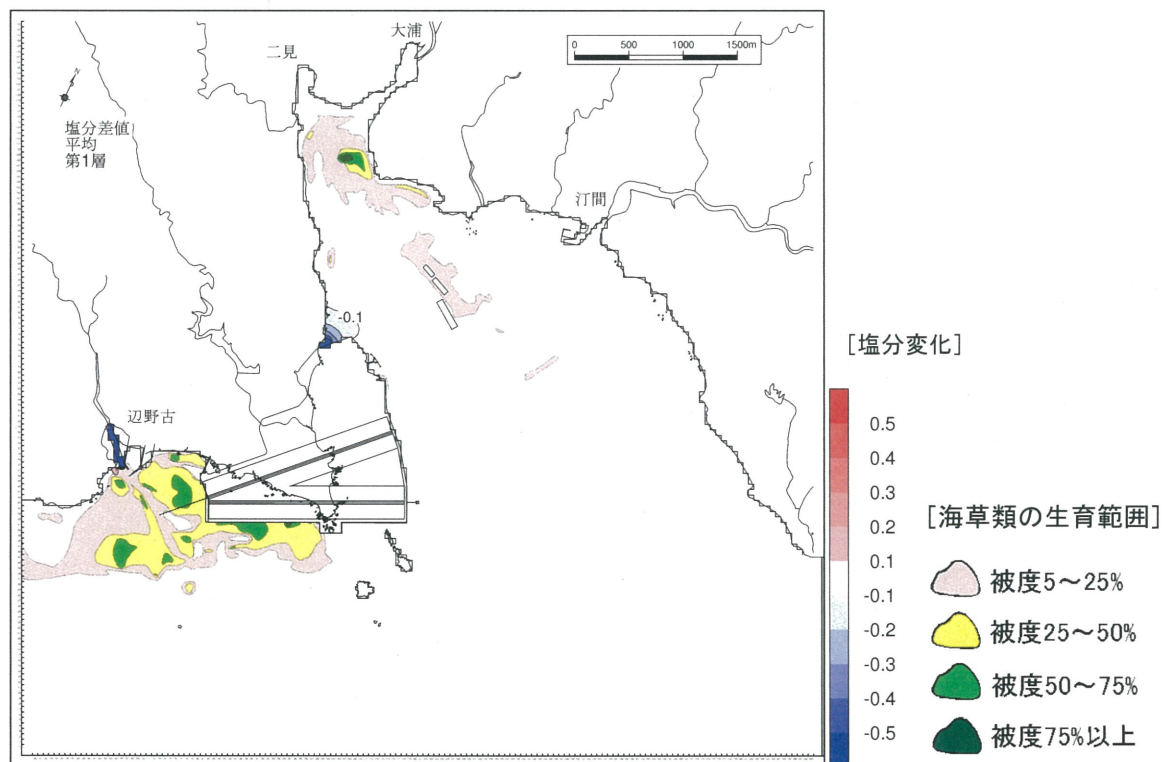
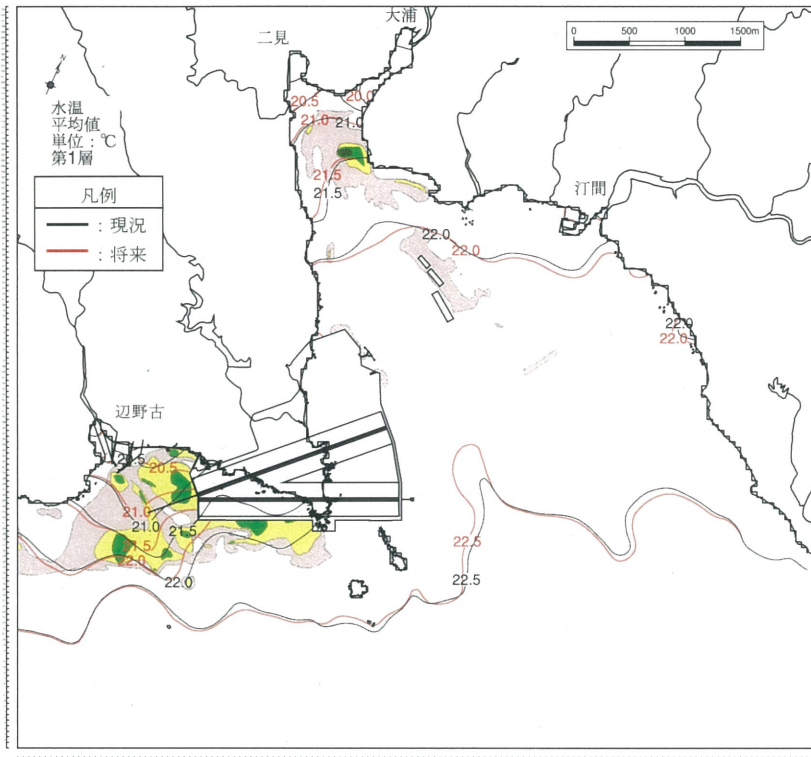


図-6.15.2.2.32 存在時の塩分変化（夏季、第1層）と海草類の生育範囲

(水温分布)



(水温変化域)

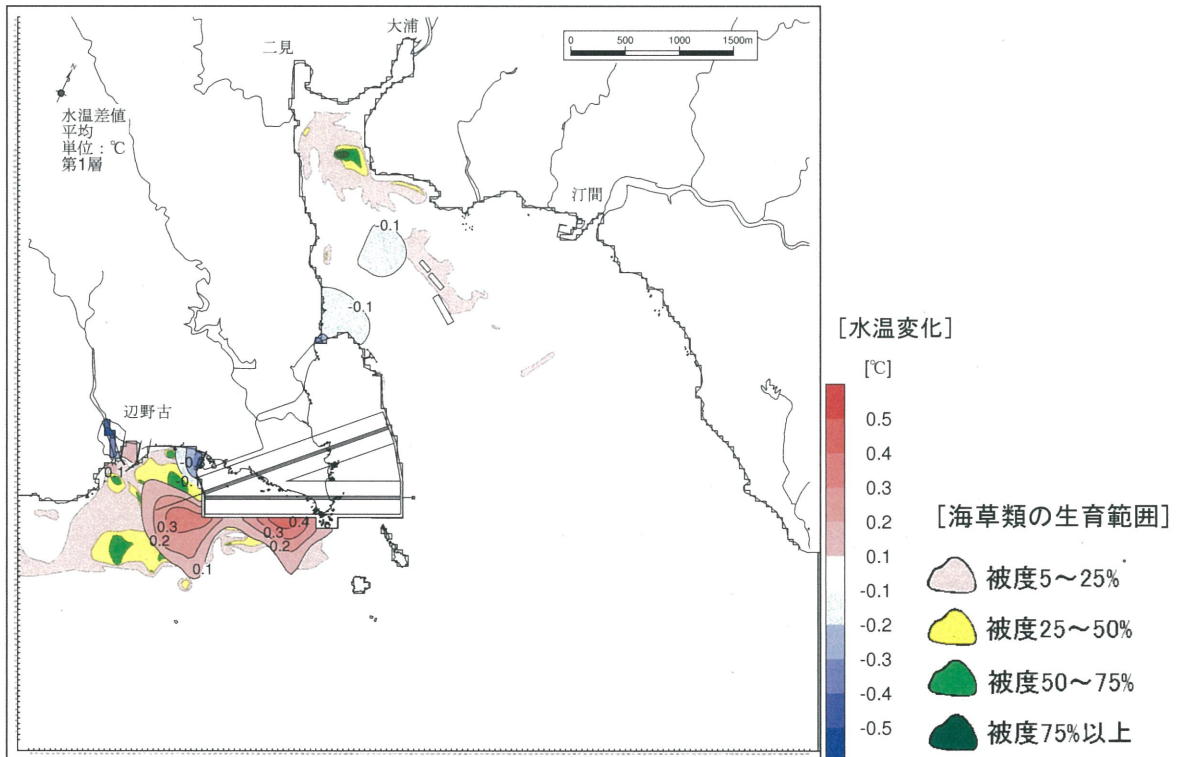
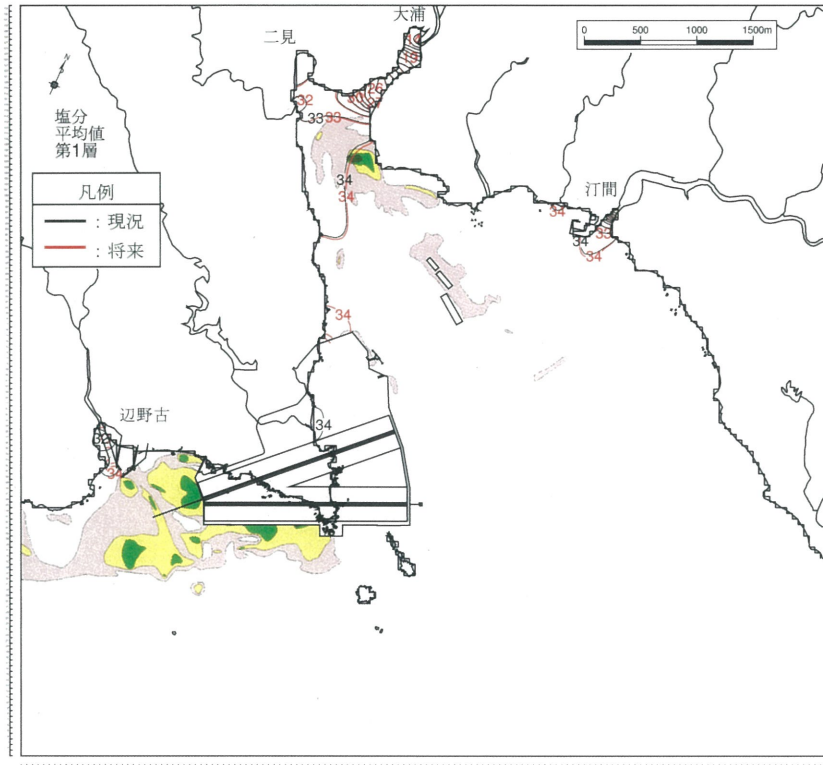


図-6. 15. 2. 2. 33 存在時の水温変化 (冬季、第1層) と海草類の生育範囲

(塩分分布)



(塩分変化域)

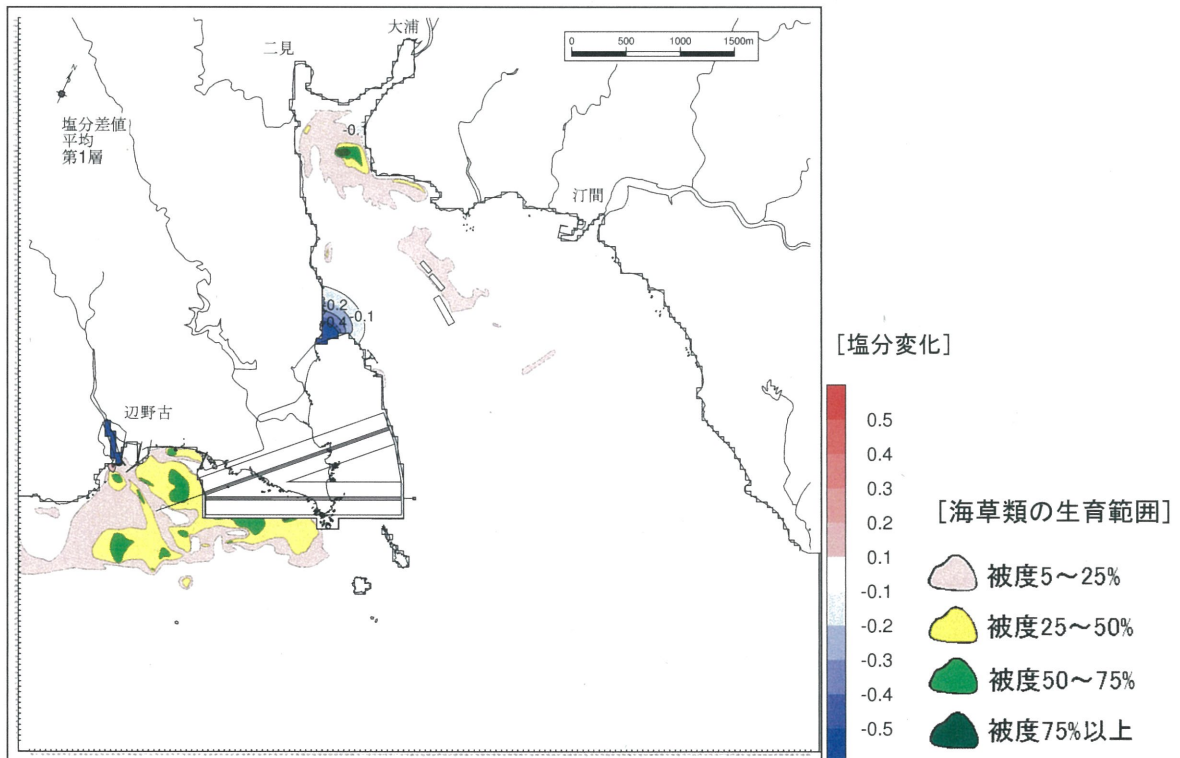


図-6. 15. 2. 2. 34 存在時の塩分変化 (冬季、第1層) と海草類の生育範囲

d) 底質の変化

海草類は、砂中に地下茎をのばして生育するため、底質の粒度組成が主要な生育条件の一つとなり、熱帯性海草藻場での底質の粒度組成の調査結果によると、海草類の生育には砂質が重要とされています（（社）日本水産資源保護協会 2004）。

底質変化については、「6.16 地形・地質」において、現地調査結果で得られた中央粒径とシールズ数との関連について検討し、四季を通じて毎月発生しうるレベルの「高波浪」もしくは毎年少なくとも1回発生する程度の「年最大波浪」の波浪計算結果より求められるシールズ数と中央粒径との間に比較的高い正の相関があることが確認されており、シールズ数が増加すると粗粒化する傾向、シールズ数が減少すると細粒化する傾向になると考えられます。

このため、底質の変化が海草類に及ぼす影響については、ここでは高波浪時（四季を通じて毎月発生しうるレベルの高波浪）の波浪計算によるシールズ数の変化をもとに、海草類の生育範囲の底質の変化を定性的に予測しました。

現況における高波浪時のシールズ数の分布を図-6.15.2.2.35、施設等の存在時における高波浪時のシールズ数の分布及び変化を図-6.15.2.2.36に示します。これによると、シールズ数が大きく変化する箇所は、代替施設本体の北側の遮蔽域と浚渫工事に伴い水深が変化する長島近傍（代替施設本体の南東側）のみです。いずれの箇所もシールズ数は小さくなるため、現況よりも細かい底質が定着することが予測されます。しかし、海草類の生育範囲においてはシールズ数の変化はほとんどないと予測されています。

このため、施設等の設置に伴う底質の変化は小さく、現況の海草類の底質環境は維持されるものと推察されます。

(資料)

社団法人日本水産資源保護協会（2004）.平成15年度ジュゴン保護対策事業報告書.